

佛教史學會第六十六回學術大會

研究發表要旨

日時：二〇一五年十一月二十二日（日）
会場：花園大学

佛教史學會第六十六回學術大会開催日程

日時…二〇一五年十一月二十二日(日)

会場…花園大学拈花館(京都市中京区西ノ京壺ノ内町八一—〇七五(八一—)五一八一(代))

午前の部(一〇〇〇〇—一二〇〇〇)

東洋部会(拈花館一〇四教室)

- ①四分律学の系譜と南山道宣—『五部区分鈔』から『四分律行事鈔』へ—大谷大学 戸次 顕彰
②大乘『大般涅槃經』迦葉菩薩品に記される煩惱と
解脱のメカニズム
宗教情報センター 佐藤 直実

- ③朝鮮明宗代における地方寺院の組織運営

—李文健『默齋日記』の記事の分析を中心に—

九州大学 押川 信久

日本部会(拈花館二〇二教室)

- ①日本古代における「宗」の形成

龍谷大学 中本 由美

- ②宗峰妙超と関山慧玄の史料における諸問題

—根津美術館蔵の元亨二年法語と無相大師遺誡を中心に—

花園大学国際禅学研究所 メルクリー・オズヴァルド

- ③明治期琉球における真宗法難事件をめぐる

—東本願寺と内務省の対応を中心に—

二松学舎大学 川邊 雄大

午後の部(一三〇〇〇—一七〇〇〇)

合同部会(拈花館二〇二教室)

- ①唐中期以降における仏教と敦煌文献

広島大学 荒見 泰史

- ②仏教と国家—浄土真宗における戦時教学の構造分析を中心として—

圓光大学校正訳院 元 永常

- ③隋代経録考

龍谷大学 大内 文雄

- ④仏教社会史研究の課題と展望

国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学 井原今朝男

四分律学の系譜と南山道宣

— 『五部区分鈔』から『四分律行事鈔』へ —

大谷大学 戸次 顕彰

南山道宣（五九六—六六七）の仏道が形成される背景には、前代における四分律学の伝統や、慧顛（五六四—六三七）・智首（五六七—六三五）・法礪（五六九—六三五）などの師の影響があったことは、これまでも指摘されていた。しかし従来の研究では、その律学の内実や、前代での課題と道宣の戒律文献との間にどのような関連があるのかという視点で検討がなされていなかった面がある。また、道宣の名著『四分律刪繁補闕行事鈔』（以下『行事鈔』）の成立背景についても、受戒の師・智首の影響が大きいと言われているが、智首の著作に関する検討が進んでおらず、特に『五部区分鈔』との関連をさらに考察する必要がある。

そこで本考察は、中国における『四分律』伝来後の律学の様相や、その中における『行事鈔』の位置付けを検討する作業の一部として、智首や道宣などの律僧が当時もっていた問題意識や課題を明らかにしていく。具体的には、①『行事鈔』の撰述をめぐる、初稿と重修との間に道宣は法礪と出会っているが、ここで両者にどのようなやりとりがあったのか。次に②中国の四分律学の伝統の中において、智首がどのような位置にあるのか。最後に③智首の『五部区分鈔』と道宣の『行事鈔』との関連がいかなるものであったのか。以上の三点を中心に検

討を進めていく。

この考察によって、道宣の『行事鈔』は前代の律学を大いに継承した上で撰述されていることが見えてくる。しかし同時に道宣は、前代の律学に対して欠点や問題点も指摘している。特に、これまで道宣の律学の師として知られていた智首であるが、両者の関連を考察することによって、道宣は智首の律学に対して若干の欠点を指摘しているという新たな側面が見えてくる。本考察では、最後に『行事鈔』序に記される道宣の文章を取り上げることによって、その欠点を克服することが『行事鈔』撰述の課題であったという点を明確にしていきたい。

大乘『大般涅槃經』 迦葉菩薩品に記される煩惱と解脱のメカニズム

宗教情報センター 佐藤直実

大乘『大般涅槃經』は、中期大乘仏教を代表する大部の經典である。サンسكريット原典は断片のみであるが、漢訳・チベット語訳資料が完全な形で現存し、注釈も多数存する。「常楽我淨」「悉有仏性」「如来常住」といった発展的な大乘仏教思想を展開しており、また、それらを主張するために、四諦や十二因縁、八聖道といった伝統的な教義を新たな定義で説明する。

迦葉菩薩品では、八聖道を「煩惱が生じるメカニズムを正しく観想すること」と再定義している。同品では、「解脱（仏性の獲得）」と「煩惱」を対概念と捉え、煩惱には次の２種類があると主張する。

(1) 新たな煩惱を生み出す（煩惱の原因になる）タイプ

(2) 新たな煩惱を生み出さない（煩惱の原因にならない）タイプ

後者は梵行を修した場合に生じると記される。ここで述べる「梵行」とは、禁欲行ではなく、「八正道」を指す。また、解脱、すなわち仏性を獲得するための修行方法として、「受」「想念」「渴愛」「触」「欲」「業」「苦」などの観想法が説かれる。「受を原因として渴愛が生じるのであるから、渴愛を断じるためには先に受を観想すべきである」「受を縁として転倒想念が生じるのであるから、先に受を観想すべきである」「受と渴愛の原因は触であ

る」「触には、煩惱の原因となるもの（煩惱触）と、解脫の原因となるもの（解脫触）の二種類がある」「無明を原因として煩惱觸が生じ、それを原因として転倒した想念が生じる」「明を原因として解脫觸が生じ、それを原因として不転倒想念が生じる」などのような因と縁と果の関係が順次説明される。

本発表では、これら一連の觀想法を分析し、同品の示す「煩惱が生じるメカニズム」及び「解脫を得るメカニズム」を明らかにしたい。

朝鮮明宗代における地方寺院の組織運営

—李文樾『默齋日記』の記事の分析を中心に—

九州大学 押 川 信 久

朝鮮王朝第十三代国王明宗（在位一五四五～一五六七）の治世は、特に明宗の生母である文定王后が垂簾聽政を行う中で、兩宗（禪宗・教宗）の復立や僧科の再開をはじめとする仏教振興政策が推進され、朝鮮時代の仏教史における画期とみなされてきた。

従来の研究は、文定王后や普雨の事蹟を明らかにしつつ、王朝政府や王室の内部における政策の展開を中心に成果を蓄積してきた。ところが、政策の遂行が当時の社会に及ぼした影響、なかでも地方社会における政策遂行の実情に対しては、ほとんど関心を向けることがなかった。こうした現状を招いた要因として、当該期の仏教政策を考察するために用いられる史料が、『明宗実録』『新增東国輿地勝覧』等の官撰史料や、王朝政府や王室に近い人物の記録に限られていたことが挙げられる。

しかし、近年、寺院関連文書や日記史料の発掘や紹介が進んだことにより、当該期の地方社会における仏教界の動向を解明するための環境が次第に整えられてきた。特に、李文樾（一四九四～一五六七）が著した『默齋日記』には、著者が慶尚道星州で流配生活を送る中で、星州李氏の影幀を祀る寺院であった安峯寺において、仏教

界との交渉を繰り広げていた様相が記録されている。『黙齋日記』の記事の内容を分析することにより、安峯寺を出入りする僧徒の動向を個別に追跡し、安峯寺の組織運営の実態を動態的に把握することが可能になる。ひいては、当該期の地方社会で寺院が果たしていた役割を考察するための糸口を得ることにもつながるであろう。

そこで、本発表では、まず明宗代に一連の仏教政策が推進される過程を、政策が地方社会に与えた影響に焦点を当てて整理する。続いて、安峯寺の組織運営の状況を、『黙齋日記』の記事に基づいて分析する。さらに、当該期の仏教政策が安峯寺の組織運営に及ぼした影響についても考察を加えることにしたい。

日本古代における「宗」の形成

龍谷大学 中 本 由 美

日本古代における「宗」の形成と展開を概観すれば、天平勝宝年間（七四九～七五七）の南都六宗―三論・法相・華嚴・律・成実・俱舎―の成立にはじまり、平安期に天台宗・真言宗の登場を待つて八宗体制の形成にいたるとされる。

「宗」の形成を考える上で注目すべきは、養老二年（七一八）十月、太政官が僧綱に対して下した五カ条の布告である。そのなかに、「五宗の学、三藏の数はそれぞれ異なるものであるから、宗義に該達し、最も宗師とするに足る人を宗ごとくに申告すること」とみえる。これが日本の文献における「宗」の初見である（『続日本記』養老二年十月庚午（十日）条）。

一方、天平十九年（七四七）の元興寺・大安寺・法隆寺の各資財帳には、三論衆や律衆、撰論衆などがみえ、「宗」ではなく「衆」が諸寺に存在したことが確認できる。「衆」が「宗」に先行することは、中国では隋代に隆盛し、法相宗の成立の影響で七世紀中葉に衰退した撰論宗が元興寺・大安寺に撰論衆として存在したこと、天平勝宝年間以降、大部分が「衆」から「宗」に統一されることによって明らかである。

すなわち、「宗」とは、養老二年の布告を機に、以前から存在していた「衆」が再編され、その結果として出

現してくるもので、日本における「宗」は、律令国家の宗教政策として形成されたと考えられる。

養老二年の布告は、太政官から僧綱に対して下されたものであるが、「宗」の形成という宗教政策を行うにあたって、その背後に留学僧や来日僧の存在が想定できる。なぜなら、「宗」という言葉は、「悉檀」(siddhanta)の訳語であり(求那跋陀羅(三七七・四三一)『楞伽阿跋多羅宝経』一一)、四世紀以降の中国では、仏教の学説・主義を意味する用語として使用されたからである。

よって、本発表では、養老二年の布告を中心に分析を加え、留学僧や来日僧の活動、また、唐や新羅の仏教事情を手がかりに、日本における「宗」の形成とその意義について考察を試みたい。

宗峰妙超と関山慧玄の史料における諸問題

— 根津美術館蔵の元亨二年法語と無相大師遺誡を中心に —

花園大学国際禅学研究所 メルクリー・オズヴァルド

根津美術館蔵の元亨二年（一二三二）の法語は宗峰妙超（大燈国師、一二八二～一三三八）が冬至小参の際の法語を弟子の宗円禅人のため、元亨二年に揮毫したものとされている墨蹟であり、重要文化財である。ところが、大燈墨蹟としてはいくつかの問題点を見出すことが出来る。

まず、諸人に示した一則の法語をそのまま特定の一人の弟子のために書き与えた墨蹟として、数多くの大燈墨蹟の中に唯一の例である。そして、本則は『大燈国師語録』に冬至小参の際の言葉として収録されているが、その年月は語録に記されていない。しかし、編年体で編集されている語録において本則の年は嘉暦三年（一三二八）に当たる。すなわち、同じ内容の墨蹟と語録の一則は年が六年間も異なり、しかも先に語録の一則があり、そして墨蹟が出来るはずなのに、順番は逆となっている。更に、墨蹟の一字が明らかに誤りである。本発表ではこの墨蹟の真贋を巡って考察したい。

一方、宗峰妙超の法嗣である関山慧玄（無相大師、一二七七～一三六一）は『無相大師遺誡』という言葉を使用したとされている。その五つの跋文の綿密な分析により、加藤正俊氏は本遺誡が偽作であり、応禪普善（一六七

三(一七四三)に作られただろうという結論に至った。

ところが、最近本遺誡が偽作ではないという意見の研究者もおられる。この議論において、『無相大師遺誡』と宗峰妙超の『大燈国師遺誡』という両遺誡を取り上げる研究は今までなかった。実は『無相大師遺誡』の中に『大燈国師遺誡』が引用されており、しかも「遺誡」と呼ばれている。しかし、現在『大燈国師遺誡』といわれる法語が「遺誡」と呼ばれ始めるのは江戸時代になってからのことであると考えられる。

本発表では両遺誡の相互関係を論じることにより、加藤氏の説を裏付ける有力な根拠を紹介したい。

明治期琉球における真宗法難事件をめぐる

— 東本願寺と内務省の対応を中心に —

二松学舎大学 川 邊 雄 大

明治十年（一八七七）十月、薩摩藩の影響を受けて真宗禁教下にあった琉球において、秘密裡に信仰を続けていた信徒が琉球藩庁によって一斉逮捕された。

これに対し、東本願寺は翌明治十一年（一八七八）一月、教団の後ろ楯となっていた内務卿の大久保利通に直訴したほか、事件について記した布教僧・田原法水の日記などが『朝野新聞』に掲載されたが、二月に藩庁は裁判を行い、信徒を流刑・罰金刑に処した。

その後、東本願寺は書面を通じて信徒の釈放などを求めたが、藩庁は拒否したため、同年七月に小栗憲一を琉球に派遣し、藩庁と交渉（八月五日）を行ったが、事態は進展しなかった。

八月二十二日、内務省出張所（那覇）において東本願寺と藩庁との会談が行われた。その席上、出張所長・木梨精一郎は、太政官布告（明治九年五月）によって藩庁は裁判権を接収されており、藩庁による裁判および処罰は違法であるとして始末書の提出を命じた。

その後、信徒は釈放され罰金は返還され、明治十二年（一八七九）三月に沖縄県が設置され琉球藩は消滅した。

以上が明治期の琉球における真宗法難事件の概要であるが、先行研究や関係資料は少なく、これまで事件の詳しい内容は必ずしも明らかではなかった。

発表者はこれまでに、小栗が住職をつとめた善教寺（大分県佐伯市）に所蔵されている「琉球日記」等を翻刻するとともに、これらの資料を用いて本事件について研究を進めて来た。

この結果、小栗の琉球滞在中（明治十一年七月十九日～八月三十日）の具体的行動のほか、小栗の琉球渡航以前から東本願寺は明治新政府（内務省）の意向を汲み、小栗が中心となって藩庁への対策を立案し、それをもとに藩庁との交渉を進めていったことなどが明らかとなった。

本発表では善教寺資料をもとに、東本願寺が政府といかなる関係を持ち、本事件の対応策をとったかについて検討する。

唐中期以降における仏教と敦煌文献

広島大学 荒 見 泰 史

唐中期の社会体制の変化によって仏教がより広い社会層へ加速的に浸透するようになり、各階層での理解と定着のために少なからざる変化をおこしていったことについてはすでに多く論じられている通りである。

その時代、特に肅宗朝から代宗朝の仏教の規範に強い影響力を持ったのはまず是不空などの密教僧であった。かくて不空を中心とした新たな時代のイデオロギーが形成されるようになったのである。同時にその当時の流れから広い社会に浸透することになった密教は、徐々に各社会層で形が変えられ、仏菩薩、始祖や僧侶の伝説化、儀礼の通俗化などが進んでいったものと見られる。変文などの講唱文学やその背景にあった儀礼に、後代に流行った浄土教の要素とともに密教的要素を色濃く残していることは、そうした時代背景を表しているといえる。

このように改めて考えた場合、唐中期以降に膨大に作成され、使用された密教資料、とくに儀軌類の翻訳から中国的な変容を知ることが、唐期中以降の社会の深層における信仰を知り、変文などのような講唱文学に如何に反映され展開していくかを考える上でも極めて重要な資料ではないだろうか。

こうした時代の中で作られた様々な儀軌類の中には、日本残存資料では『龍樹五明論』、『佛説金毘羅童子威徳經』、『宝蔵天女陀羅尼法』などのように「後人の妄作」として低くみられてきた資料が少なからずある。また敦

『煌文獻でも『大部禁方』、『水散食』、『佛説大輪金剛惣持陀羅尼法』、『三萬佛同根本神秘之印法』、『觀世音菩薩符印』などは、やはりあまり注目されずにいる。さらに言えば、これらの間には一定の共通性が見られているにもかかわらず、両者の比較を通じて唐中期以降の仏教の広がり和社会への影響を知ろうという視点は、これまで余りなかったのではないかと思う。

筆者は、以上のような考えにより、敦煌に残される密教儀軌類の資料整理と、日本の密教資料の比較検討を通じた、宗教儀礼の研究、文学への影響を研究することの重要性を新たに主張していきたいと考える。

仏教と国家

——浄土真宗における戦時教学の構造分析を中心として——

圓光大学校正詠院 元 永 常

最近、国家中心の戦略という環境変化と関連して、宗教の役割を新たに振り返る試みが台頭している。日本は近代国家の確立後、一八九五年の日清戦争を始めとし、一九四五年の終戦に至るまで十年ごとに戦争を起こした。浄土真宗は、この時期の従軍僧派遣はもちろん、戦時教学を通して国家主義を擁護した。教義の歪曲をもたらした戦時教学は、太平洋戦争期に絶頂に至り、敗戦後教団構成員は精神的武装解除を経験せざるを得なかった。この教訓から不殺生を第一の戒律とする仏教界全体は、反戦や平和に向けて努力すべきである。

本発表は、浄土真宗の戦時教学の構造における分析を主題としている。周知のごとく、戦時教学の核心問題は、蓮如の教えである真俗二諦の近代的適用と跛行として知られている。敗戦に近づくにつれて結局王法為先を立たせた戦時教学によって、浄土真宗の教学は戦争国家の理念の中に埋没してしまふ。そこまでに至るには、浄土真宗の教義が歪曲されていく全体の構造を見なければならぬ。その中では、浄土真宗教団と国家権力構造の類似性、超越的存在としての阿弥陀如来と現人神である天皇との等価性、無我や空のような伝統的な仏教教義の歪曲を通じた戦争の正当性、集団や公共性を媒介して善悪判断を不可能とした非倫理性などが挙げられる。そして、絶対的

不変の価値である信仰世界が世俗世界に陥没されていくと同時に、真俗二諦の究極的価値である聖俗の緊張と調和を通じた開かれた世界観を堅持できなかつた。本発表は、真俗二諦の二元的構造が戦時教学の中でどのようなように跛行の構造に移行されていくのかを、戦時教学の資料から考察することを目標とする。

隋代経録考

龍谷大学 大内文雄

『大正新脩大藏経』の史伝部に収載される隋代に著された史書は、僅かに費長房の『歴代三宝紀』（以下、『三宝紀』と略）、灌頂の『隋天台智者大師別伝』の二種のみである。これに対し経疏部・諸宗部には、隋の智顛・灌頂師弟、或いは吉蔵、慧遠等の錚々たる著作が偉観を呈しており、これに比べて史書の少なさは際立っている。しかし經典目録（以下、経録と略）に目を向けてみると、長安・大興善寺に置かれた法経を首班とする翻経衆によって文帝の開皇一四年（五九四）に『衆経目録』（以下、『法経録』と略）が編纂され、次いで仁寿年間（六〇一～六〇四）になると同じく翻経衆彦琮によって『衆経目録』（以下、『彦琮録』と略）が編成された。その間、開皇一七年（五九七）には翻経学士費長房によって入蔵録を持つ『歴代三宝紀』も編纂され、こうして文帝治世の開皇一四年から十年に満たぬ間に、仏典集成の基準を示す三種の仏書が編纂されていることは特筆される。

『三宝紀』はその巻一五・開皇三宝録総目序に、外題を『開皇三宝録』、内題を『歴代紀』とすると言うように、あくまでも仏法僧三宝歴代の展開の跡を、仏典漢訳の編年史としてまとめた史書である。その費長房が、漢訳編年史を朝代ごとに「代録」としてまとめ、更に史書として異例となる「入蔵録」を設けた直接の影響は、『法経録』編纂の当事者でもあったところにあるに相違なく、法経・彦琮・費長房の三者は、直接明確に証拠だ

てる史料に乏しいものの、翻経衆及び学士として密接な関わりを持っていたものと思われる。

『三宝紀』によれば、『法経録』は、当時国策として位置づけられていた訳経事業を主務とする二十大徳によって編纂され、わずか二カ月の短期間で作成された。この経録はまた当時の隋朝の文教政策と密接に連動していた。隋朝創業間もない開皇四年(五八四)に実施された『四部書目録』四巻の作成の担当者牛弘が、この『法経録』編纂に直接関与していたからである。

本発表では、『法経録』『三宝紀』『彦琮録』を文帝治世下の文教政策を反映する歴史記録として捉え、経録を単にいわゆる簿録としてのみ見るのではなく、まして『三宝紀』の扱いを経録としてのそれに終始させるのではなく、唐代前期を先導する歴史的位置を占める史書であることを確かめて、隋代仏教史の一端に触れてみたい。

仏教社会史研究の課題と展望

国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学 井原今朝男

報告者に与えられた課題は、仏教社会史の問題提起について意見を述べよということである。仏教史研究分野の枠外にいる日本中世史研究者にすぎない報告者にとって、このような機会が与えられたことは大変ありがたいことで感謝したい。

1、仏教社会史研究の問題提起

拙著『史実中世仏教 第一巻・第二巻』（興山舎、二〇一一・一三年）で、「仏教社会史への新たな道」を問題提起した前提には、国立歴史民俗博物館の共同研究展示「中世寺院の姿とくらし」（山川出版社、二〇〇四年）がある。その意図はつぎの諸点にあった。

①宗派・宗祖の思想を学ぶ仏教史や仏教思想史の枠組みを打破して、歴史に埋もれた名もなき中世僧侶や中世寺院が地域社会で果たした役割や機能をあきらかにしたい、②神仏習合と神仏隔離による中世宗教年中行事の解明、③東アジアの諸教混淆・諸宗兼学の中世仏教の解明、④宗教社会史のため多様な史料群への史料批判学の創造、などであった（拙著『中世寺院と民衆』臨川書店、二〇〇四年）。

2、仏教社会史研究の研究成果

二〇〇〇年代には中世史・寺院史研究の分野で新しい研究成果が登場していた。第一に、中央・地方寺社の聖教類の史料化、自治体編纂誌での石造物・金文・絵画史料などによって、地域社会における在地僧侶や莊園鎮守・村落寺院の役割と機能が具体的に解明されはじめた。葬送・逆修・追善・供養・周忌法会など年中行事や生活史と結びついた仏教行事の解明が中央・地方を問わず進展した。第二に、顕教・密教・念仏・律・禪の宗派を超えた諸宗兼学（教の面）と専修（行の面）の二面が解明され、寺院内部の生活史への関心が登場した。第三に中国仏教がすでに儒教・道教などを取り込んだ諸教混濁であり、中世仏教が仏教教学のほかに神道・陰陽道や習俗・民俗・俗信・社会習慣を取りこみ、中世仏教の習俗・呪術化と生活技術面での革新や合理化の二面性があるらかにされはじめた。

3、仏教社会史研究の課題

これまで縁起・説話・建築・美術・音楽・芸能・習慣・生活などに分割して分析されてきた研究分野を「さまざまな面で神仏への信仰を根底に有していた」（五味文彦『躍動する中世』小学館、二〇〇八年）視点から、未分化な融合の世界のまま、仏教社会史として全体像をあきらかにできないか。宗教的信仰の世界が全社会生活を規定していた歴史像をトータルとして描くこと。